

フランス人間科学館（MSH）の日本プログラム

著者	中牧 弘允
雑誌名	民博通信
巻	126
ページ	22-23
発行年	2009-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10502/4532

フランス人間科学館 (MSH) の日本プログラム

文・写真 中牧弘允

フランスはパリにあるMSH (Maison des Sciences de l'Homme)。日本語観光ガイドブックのパリ市街図には人間科学研究所と記されているが、本誌120号では齋藤晃氏が人間科学館として紹介している。民博では人間科学館が正式に採用されているが、フランス国立人文科学館と訳すところもある。一方、フランスではふつう頭文字をとってエム・エス・アッシュと呼ばれている。MSHはセヌ川の南、ラスパージュ大通りの54番に居を構えている。おなじビルには社会科学高等研究院 (Hautes Etudes en Sciences Sociales) も入っているの、フランスを代表する人文社会系の研究拠点のひとつであることはまちがいない。だが、外から見るとMSHの組織は複雑にみえるし、機能も多彩なよ

うだ。一言で説明するのは困難だが、齋藤氏は「研究所」というより「斡旋所」に近いと指摘している。個人研究の牙城ではなく、共同研究を推進するセンターといえいいだろうか。

日本プログラム

そのMSHに日本プログラム (Programme Japon) が立ち上がった。2004年のことである。きっかけは担当のジャヌ・コビー女史がその前年、総合地球環境学研究所 (地球研) の客員教授をつとめたことにある。その後、地球研とMSHは協定にもとづき「野生の消費」や「米と水」などのシンポジウムをパリで開催している。他方、民博とMSHとのあいだにも2004年12月に学術協定が締結された。そして民博からは

2006年に齋藤晃氏が最初に派遣され、山中由里子、樫永真佐夫の両氏がつづき、それが2007年5月にMSHで開催された国際シンポジウム「思考の道具『テキスト』とその社会的機能の比較研究」につながった。このように日本プログラムは日本との学術交流をすすめてはいるが、かならずしも日本研究に限定されているわけではない。

コビー女史とは旧知の間柄であるのでコビーさんと呼ばせてもらうが、彼女が勤務する部屋は「研究室」というよりは「オフィス」である。ドアの横には「日本プログラム」のプレートが掲げられているとはいえ、

コビーさんがその部屋を独占しているわけではなく、MSHの校閲者と机を並べている。

コビーさんはCNRS (Centre National de la Recherche Scientifique) の研究員でもある。MSHでは日仏学術交流の窓口を兼務しているが、ご自身は日本の食文化に造詣が深く、いわゆる物質文化研究にも従事してきたジャパン・アンソロポロジストである。長い間、木曾の山村に住み込み、フィールド調査を重ねてきた。その影響からか、コビーさん自身は食と環境をテーマに日本との学術交流を進めようとし、地球研と民博を中心に日本との連携をはかってきた。

「都市と環境」シンポジウム

そうしたなかで、「都市と環境」をテーマとする一連のシンポジウムがはじまった。パリ西ナンテール大学のアン・アンドルエ女史がもうひとりのプロモーターである。彼女は日本の産業クラスターの研究などに従事している経済学者である。2007年の暮れ、たまたまわたしはフランス日本研究会に招かれて各地で講演したが、パリでコビーさんと会った際、NIRA (総合研究開発機構) のプロジェクトで都市の文化政策に関する研究にかかわっていることに言及した。それもひとつの引き金となり、「都市と環境」というテーマが浮上したようなのである。わたしは2008年には科研によるヨーロッパ調査も計画していたので、それにあわせて民博とMSHとの協定により、パリに短期滞在することになった。

滞在の終わりには「都市と環境——文化・都市・クラスター」というシンポジウムが10月13日から3日間にわたってMSHで開催された。初日には「文化と都市化」、「競争クラスター、環境、地域的次元」という2つのセッションがもうけられ、8つの報告があった。参加者は15人ほどだった。2日目には「都市と農村の交流」と「都市と建築」というセッションがあり、やはり8つの報告が予定されていた。最終日は「サテライト・スタジオ——都市、建築、持続的発展」と名づけられた報告会にあてられていた。

わたしは初日しか参加できなかったが、なかでもアルベール・カーン博物館のポー＝ベルチエ館長の報告に興味をひかれた。アルベール・カーン (1860-1940) は銀行家として莫大な富を築き、20世紀初頭、私財を投じて「世界アーカイブ」を設立、世界中に写真家を派遣して日常生活の写真や映像を撮影したことで知られている。日本の貴重な映像記録も残されているが、館長の報告ではカーンは渋沢栄一や益田孝などとの交遊を通じて文化政策に大きな役割を果た



MSHの側面。



MSHの正面玄関。



2009年6月23日のシンポジウム（於日仏会館）。

したことに言及していた。それならば渋沢史料館との接触があるにちがいない。その点をたずねると、両館ではすでに展示の交流が企画されているとのことだった⁽¹⁾。

わたし自身は初日の冒頭で「Cultural Resources for Urban Policy and Creative Industry: Some Approaches to the Environment Problem」と題する報告をおこなった。そこでは民博や東京大学の「文化資源」の概念を援用し、文化都市政策の対象は国宝や重要文化財の活用だけではなく、地元の文化資源の掘り起こしにもあると主張した。また、EUの「文化首都」などに言及しながら、都市間の連携を「トランスメトロポリタン・ネットワーク」と言い換え、そのモデルを提示した。そして「創造都市」や「世界遺産」がいかに「文化資源」を開発し、「トランスメトロポリタン・ネットワーク」の推進をはかっているかについて日欧の若干例を紹介した。最後には、京都の景観論争にふれ、セーヌ川のボンデザール（芸術橋）に似た橋を鴨川に架ける構想が市民運動の高まりによって断念させられ、近年はきびしい環境条例を施行するようになり、京都市は経済優先から環境に配慮する文化都市へと舵を切ったように見える、と結論づけた。



木曾の民家の内部。

パリ市民には刺激的な話題だったせいか、ボンデザールに関する質問が相次いだ。他方、ほぼ同様の話題を2009年6月23日に東京の日仏会館で開催された「都市と環境——経済・文化クラスター」というMSHのシンポジウムでも提供した。参加者は10人あまりだったが、新たに加えたトピックのちがいがからか、今回の反応は大きく異なっていた。

日仏会館の館長である経済学者のマルク・ウンベール氏は都市文化政策のポップ・ステップというテーゼ⁽²⁾に賛意を示しつつ、NIRAの本⁽³⁾が翻訳されているかどうか、トランスメトロポリタン・ネットワークの効用はいかなるものかについて質問された。また、フランス人の大学院生のひとりは、東大の文化資源学コースの修了生たちがどのような職についているかと聞いてきた。彼女自身のフランスでの就職を視野に入れたQ&Aは昼食時までつづいた。

コビーさん自身の報告もユニークだった。「都市における自然」と題し、日本のマーケットにおける野生の野菜——タラの芽、フキノトウ、コゴミ、タケノコなどの山菜——の商品化を取り上げていた。後で聞けば、パリでも野生のキノコやアスパラガスが売られているという。「野生の思考」ならぬ「野生の趣向」であるが、山菜をあえて栽培し都会の食卓に乗せることの意味を問うたのである。野生を取り込んで文化に活を入れる、あるいは都市文化に飼いならされてもしぶとく存続する野生、そういった発想であろうか。

木曾の民家

ところで、コビーさんは木曾の山村の民家を数年前、パリに持ちこんだ。その民家は何らかの文化財に指定されていたわけではない。6人家族の生活空間であった築150年ほどの建造物である。しかし、それ

は神棚のお札や織機などとともに海を渡り、囲炉裏をかこむひと昔前の生活臭をただよわせている。現在はシャイヨー宮のなかのミュゼ・ドゥ・ロム（人類博物館）に仮住まいしているが、一般にはまだ公開されていない。この民家こそまぎれもない「文化資源」である。これをパリ市民はどう取りこんでいくのか、「都市と環境」の課題とも重なり、その解決策が見ものである。アルベール・カーン博物館は太鼓橋の架かる日本庭園や木造の日本家屋でも知られているが、はたして木曾の民家はフランスのどこに安住の地を見出すのであろうか。

注

- (1) 渋沢史料館では企画展「渋沢栄一とアルベール・カーン——日仏実業家交流の軌跡」を2010年3月20日から5月5日に予定している。
- (2) 都市文化政策の課題を6項目の提言にまとめたところ、Horizontal Management, Partnership-Style, Social Inclusion, *Transpolitan* Network, Cultural Entrepreneur, Program Evaluationの頭文字をとっている。詳細は注3の文献（275-278頁）を参照のこと。
- (3) 中牧弘允、佐々木雅幸、NIRA編『価値を創る都市へ——文化戦略と創造都市』NTT出版、2008年。

なかまき ひろちか

民族文化研究部教授
専門は宗教学、経営人類学、ブラジル研究
著書に『カレンダーから世界を見る』（白水社2008年）、『会社のカミ・ホトケ：経営と宗教の人類学』（講談社2006年）、共編著に『価値を創る都市へ：文化戦略と創造都市』NTT出版2008年、『都市空間を創造する：越境時代の文化都市論』（日本経済評論社2006年）など